

称号及び氏名 博士(言語文化学) 中俣 尚己

学位授与の日付 平成21年3月31日

論文名 日本語並列表現の体系と記述

論文審査委員  
主査 野田 尚史  
副査 張 麟声  
副査 田浦 秀幸

## 論文要旨

### 1. 本研究の目的と理念

本研究の目的は日本語の並列表現を「網羅的」かつ「体系的」に記述することである。

日本語には多様な並列表現が存在する。例えば、名詞句と名詞句を並列する際に使われる並列助詞には「りんごとみかん」「りんごやみかん」「りんごもみかんも」のようなバリエーションがあり、述語と述語を並列する際に使われる接続助詞には「時間もなくててお金もない」「時間もなければばお金もない」「時間もないしお金もない」「時間がなかつたりお金がなかつたり」のようなバリエーションがある。さらに、文と文を接続する際に使われる接続詞の中にも「この店は安い。そしておいしい」「この店は安い。さらにおいしい」「この店は安い。それにおいしい」のように並列関係を表す形式がたくさんある。

並列表現はこのように、並列助詞、接続助詞、接続詞と3つの異なる品詞カテゴリーにわたって分布しているが、そのつながりを明らかにした上で、なおかつ個々の形式の具体的な差異にまで踏み込んだ研究は多くなかった。本研究ではこのような広がりをもつ並列表現について、「網羅的」かつ「体系的」な記述に取り組んだ。

「網羅的」とは多くの形式を扱うということである。具体的には並列助詞では「と」「や」「も」「,」「か」「とか」「やら」「だの」「なり」「だか」「に」を、並列を表す接続助詞では「ば」「し」「て」「連用形」「たり」「とか」「やら」「だの」「なり」「か」「だか」「わ」を、並列を表す接続詞では「それから」「そして」「また」「さらに」「しかも」「それに」「そのうえ」「 $\phi$ 」「一方」「次に」「なお」「または」「あるいは」「もしくは」「ないしは」「それとも」を扱った。

「体系的」とは統一的な方法で首尾一貫した説明を行うということである。本研究では各形式ごとに議論を統語レベル・意味レベル・語用レベルに分け、それぞれのレベルにおいて統一した用語のもとに議論を進めた。

## 2. 本研究の構成と方法

本研究では第1部で本研究の理念・枠組みについて説明した後、第2部で並列助詞、第3部で接続助詞、第4部で接続詞について、各形式をとりあげ、統語・意味・語用レベルにわけて記述を行った。本研究の理論的枠組みが有効であることを明らかにするため、並列助詞においては質問紙を用いたアンケート調査をもとに共通の構造・属性という概念が使用動機になっていることを明らかにした。また、接続助詞と接続詞においてはコーパスからの大量の用例にタグ付けを行うことで各形式がどのような意味関係の事態を並列しているのかを探った。

そして、各形式が要素を結びつける力である「網羅性」と要素自体の意味関係である「類似性」の強さをスケール化することにより、日本語の並列表現の体系を明らかにした。

## 3. 本研究で用いた理論的枠組み

### 3. 1. 先行研究で述べられていた「全部列挙・一部列挙」

従来の先行研究でもっとも多く議論されていたのは「全部列挙」か「一部列挙」かという問題であった。これは述べられている要素以外の要素が他に想定できるか否かという説明で、日本語教育の導入にも多く用いられている、直感的にわかりやすい説明である。この説明では普通、「と」は全部列挙で他に要素がない、「や」は一部列挙で他に要素がある、と説明されるが、すでに先行研究でも反例が存在することが指摘されていた。

- (1) 自治体職員が本来、昼間に取得すべき休息時間を、勤務時間の開始直後または終了前に設定している自治体が全国の3割近くに上ることがわかった。一部の職員はこれを悪用して日常的に遅刻や早退している。

〔毎日新聞〕2002年1月4日夕刊)

(1)において休息時間を開始直後に設定すれば遅刻に、終了前に設定すれば早退である。文脈から悪用できる設定は2通りしかなく、よって、上記の「や」は現実的には全部列挙としか考えられない。また、「と」の全部列挙についてもキャンセルされる場合がある。

本研究では「他にもある」あるいは「他にない」という意味を語用論でいう推意と考え、「排他的推意の有無」として語用レベルの議論で扱った。つまり、これらはキャンセル可能な意味であり、形式固有の特性ではあるが、絶対的な条件ではないということである。

### 3. 2. 統語レベル：「網羅性」

「全部列挙・一部列挙」の代わりに本研究で重視したのが、各形式がもつ統語的素性である「網羅性」と、並列される要素に見られる意味関係である「集合の形成動機」である。

まず、「網羅性」とはどのような場合でも並列されたすべての要素が述語ならびに他の要素すべてと結びつくという性質のことであり、網羅性がある場合には「+網羅性」、網羅性がない場合には「-網羅性」と表示する。以下に例文を示す。

- (2)a. 私は毎日ビールとワインを飲む。【+網羅性】
- b. 私は毎日ビールやワインを飲む。【-網羅性】

(2)a.では毎日ビールとワインの両方を飲むという解釈になるのに対し、(2)b.ではある日はビール、ある日はワインという解釈になる。これは他に要素があるかないかといった

議論とは別種の、キャンセル不可能な本質的な性質である。さらにこの網羅性は名詞句内部や主題部といった統語構造上の出現位置によって変化するという特性が明らかになった。

また、接続助詞・接続詞においては「事態の提示方法」についても考えた。これは、2つの事態を1つの事態として提示する「結合提示」か、2つの事態として提示する「分離提示」かということである。端的に言えば「結合提示」は異なる時空間の事態を提示することはできない。

(3)a. ?この美術館は今までも多くの人を訪れて、これからも訪れる。【結合提示】

b. この美術館は今までも多くの人を訪れ、これからも訪れる。【分離提示】

この「網羅性」や「事態の提示方法」は各形式が要素を結びつける力の強さを表していると考えられる。「+網羅性」で「結合提示」の形式は強固に要素を結びつける。

### 3. 3. 意味レベル：「集合の形成動機」

次に、「集合の形成動機」であるが、先行研究でも並列表現の説明に「集合」という用語は使われていた。しかし、それぞれの形式によって作られる集合がどのような特性を持っているのかということは明らかにはなっていなかった。本研究では以下のような作業仮説を立てた。

(4) 人間はものごとを様々な方法でグループ化することができる。日本語の並列表現のバリエーションは人間のグループ化の方法、ものごとの捉え方の違いを反映している。人間がものごとをグループ化する時の方法には「隣接性」によるものと「類似性」によるものの2種類しかない。類似性によるものとは長期記憶にアクセスするものである。隣接性によるものとは、要素が同じ「場」にあると観察できるものである。長期記憶にアクセスしない場合は、必ず隣接性によるグループ化となる。

長期記憶にアクセスしない隣接性を集合形成動機とする形式は「と」などで、「ハリー・ポッターと賢者の石」のように意味的に何ら関係性が見いだせないようなものでも並列できる。

一方、類似性は、その内実によってさらに下位分類が可能である。

(5) (研究室の自己紹介で)

a. 初めまして。佐藤といいます。スキーやスノボが大好きです。

b. #初めまして。佐藤といいます。スキーもスノボも大好きです。

(6) (研究室の自己紹介で)

a. \*初めまして。佐藤といいます。研究やビールが大好きです。

b. 初めまして。佐藤といいます。研究もビールも大好きです。

研究室の自己紹介という文脈を考えた時、(5)a.では「や」は問題ないが、(6)a.は不自然である。これは「や」が「共通の構造・属性」をもとに集合を形成するからである。「スキー」と「スノボ」は冬とかスポーツといった、聞き手にも明らかな共通点があるが、「研究」と「ビール」にはそれがない。

一方、「も」は(5)b.は話の初めとしては不自然である。(6)b.は問題ない。これは「も」が当該名詞句の談話への「出現可能性」をもとに集合を形成するからである。(5)と(6)のような差異は各要素がどんな意味・情報を持っているかに注目しなければ説明できない

現象である。類似性の下位分類にはこの他に「,」「なり」などがもつ「同一のカテゴリー」と「だか」「それとも」がもつ「共通の指示対象」がある。集合の形成動機とはマーカー以前に並列される要素自体が本来的にもつ結びつく力であるといえる。

#### 4. 体系化と結論

本研究では、各形式について統語・意味・語用それぞれの特性に着目し、日本語の多様な並列表現を体系化した。大まかに言えば、日本語の並列表現は「や」や「し」のように意味的に類似性が高いものを緩やかに結びつけるタイプと「と」や「て」のように意味的に類似性がないものを強固に結びつけるタイプがあり、両者の間には様々な形式が連続的に存在している。また、文と文を並列する接続詞は並列助詞、接続助詞よりも緩やかに意味関係を既定する傾向があった。さらに、コーパス調査からは高い類似性を必要とするものほど、出現数が少なくなるという相関関係も確認された。

また、モノレベルでは「一網羅性」という結びつけ方が基本であり、コトレベルでは「+網羅性」という結びつけ方が基本であることがわかった。

日本語に多様な並列表現が存在するのは、単に等位接続であるということを表しているのではなく、要素をどれだけ集合として強固に結びつけるかということと、要素にどれだけ類似性がみられるかということを表しているためであるといえる。並列表現は要素と要素の論理関係のマーカーであるとともに、意味関係のマーカーでもあるのである。

## 審査結果の要旨

### 1. この論文の意義

この論文は、現代日本語の並列表現、つまり、並列助詞を使う名詞句と名詞句の並列、接続助詞を使う述語と述語の並列、接続詞を使う文と文の並列という3種類の並列表現を網羅的かつ体系的に記述したものである。並列表現については個々の並列助詞や接続助詞、接続詞に関する研究はこれまでも行われてきたが、レベルの違う3種類の並列表現の全体像を明らかにした研究はまだなく、その点に大きな意義がある。

### 2. この論文の総合評価

この論文は、研究対象、データの収集、記述方法、研究結果のいずれにおいても次のように優れており、高く評価できる。

- (1) 研究対象：これまで無関係に扱われるのが普通だった名詞句の並列、述語の並列、文の並列を一括して扱い、かつ、それぞれの並列形式をほぼ網羅している。
- (2) データの収集：コーパスを利用して大量の用例を収集し、それを一つひとつ丹念に調査している。また、必要に応じて、質問紙を用いたアンケート調査も行っている。
- (3) 記述方法：すべての形式の記述を統語レベル、意味レベル、語用レベルの3つに分けて行っている。どのレベルにおいても統一的な用語を用いて一貫した記述を行っ

ている。

- (4) 研究結果：従来の研究で主流だった「全部列挙」か「一部列挙」かという観点を排し、統語的特性である「網羅性」と、並列される要素に見られる意味的特性である「類似性」、語用的特性である「排他的推意」によって、名詞句の並列、述語の並列、文の並列に使われる各形式の互いの関係を明快に位置づけることに成功している。

### 3. この論文の評価の詳細

#### 3.1 第1部「本研究の理念と枠組み」に対する評価

第1部では、本論文の研究対象や研究方法が述べられている。研究対象については、並列助詞による名詞句の並列、接続助詞による述語の並列、接続詞による文の並列という3種類を網羅的に同じ枠組みで体系化する点が画期的である。方法論については、統語レベル、意味レベル、語用レベルという3つのレベルから多角的に分析する点が魅力的であり、高く評価できる。

#### 3.2 第2部「並列助詞の体系的記述」に対する評価

第2部では、並列助詞を使う名詞句と名詞句の並列が扱われている。従来の研究では特に「と」と「や」の違いを説明するために設けられた「全部列挙」か「一部列挙」かという観点が重視されていたが、その問題点を的確に指摘している。そして、並列助詞の体系化のために、統語的特性として「網羅性」を、意味的特性として「類似性」を、語用的特性として「排他的推意」を重要なものとし、「と」と「や」だけでなく、「も」や「か」などの並列助詞の体系化に成功している。コーパスから集められた大量の用例に基づく分析が展開されており、意味に関する許容度の判定を求めるアンケート調査なども効果的に使われ、結論に説得力がある。

#### 3.3 第3部「並列を表す接続助詞の体系的記述」に対する評価

第3部では、接続助詞を使う述語と述語の並列が扱われている。述語の並列についての体系的な研究はこれまであまりなかったが、この論文では、名詞句の並列とほぼ同じ枠組みで、統語的特性として「網羅性」を、意味的特性として「類似性／隣接性」を、語用的特性として「排他的推意」を重要なものとし、「ば」「し」「て」、連用形、「たり」など多くの形式がある接続助詞の体系化に成功している。コーパスから集められた大量の用例に対して、形式や意味の観点から「同構造」「同評価」「対比」などのタグを付け、その分布をもとにそれぞれの接続助詞の特徴を記述する試みも従来の研究にはほとんど見られなかったものであり、評価できる。

#### 3.4 第4部「並列を表す接続詞の体系的記述」に対する評価

第4部では、接続詞を使う文と文の並列が扱われている。接続詞は数も多く、従来は接

続詞の分類や個々の接続詞の用法の研究が中心だった。この論文では、名詞句の並列や述語の並列とほぼ同じ枠組みで、接続詞の体系化が行われている。ただし、語用的特性である「排他的推意」は接続詞の記述ではあまり問題にならないとして、統語的特性としての「網羅性」と意味的特性としての「類似性／隣接性」を重要なものとして、「それから」「また」「さらに」「または」など多くの形式の体系化を行っている。接続詞を使う文と文の並列では並列される文が多様であるので、形式や意味の観点からのタグ付けが非常に有効に働き、説得力を高めている。

#### 4. 今後の課題

この論文では現代日本語の並列表現の体系を十分に明らかにすることができた。また、個々の並列表現の記述もきめ細かく行われている。

今後は、まず、この論文をもとにした著書の刊行を目指して、論文内容のさらなる改訂を行うことが期待される。

さらに、将来的には、さまざまな専門の研究者と連携しながら、日本語の並列表現の歴史的变化や、他の言語との対照研究などを進め、この論文で明らかにしたことをもっと広い視野からとらえ直すことが期待される。

#### 5. この論文の外部評価

この論文の内容の一部は、次のような論文として、各分野の一流の学会誌に掲載されている。採択率が低いこのような学会誌に論文が採択されたことは、この論文内容が学会からも高い評価を受けていることを示している。

中俣尚己「名詞句並列マーカーの体系的分析——「と」・「や」・「も」の差異に着目して——」『日本語の研究』第5巻1号（『国語学』通巻236号），pp.31-45，日本語学会，2009年。

中俣尚己「日本語並列節の体系—「ば」・「し」・「て」・連用形の場合—」『日本語文法』7巻1号，pp.19-34，日本語文法学会，2007年。

中俣尚己「「善人もいれば悪人もいる」のような並列文について—「し」を用いた並列との比較—」『KLS』26，pp.187-207，関西言語学会，2006年。

また、この論文を日本語教育の観点から発展させた研究が、世界各国の日本語教育関係学会が合同で2年に1度開催する国際研究大会で次のような研究発表として採択され、閉会式で「特色のある発表」の一つとして紹介され、注目された。

中俣尚己「「～たり～たりする」という形は標準的か？—コーパスからみる母語話者と学習者の使用実態—」第7回日本語教育国際研究大会，釜山外国語大学校（韓国），2008年。

これも、申請者の研究内容が学界から十分な評価を受けていることを示すものである。

#### 6. 審査委員会の結論

本審査委員会は、全員一致で、申請者に対して博士（言語文化学）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。